

---

# 嘘人たちの部屋

愁朝巳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘人たちの部屋

### 【NZコード】

N1752D

### 【作者名】

愁朝巳

### 【あらすじ】

ある警察署の留置所の中の出来事。それぞれに陰をもった四人は・・・

## プロローグ

・・・・ここは何処なんだ・・・・昨夜の事を思い出さない・・・・頭痛がする・・・・

『おはようございます』

朝7時、目を覚ますと三人の男がいた。

「何やつた？」

「こいついうとこ初めて？」

「まだ酔ってる？」

矢継ぎ早に質問を浴びる。三人の真似をし布団を同じようにたたむ。

どうやらここは留置所の中のようだ。

部屋の戸が開けられ三人が布団を持って出していく。真似をして後に続く。

洗面 タオルと歯ブラシが用意されている。歯を磨こうとし、歯みがき粉がないのに困っていると、同部屋の年の割に髪の薄い男が自分の歯みがき粉を付けてくれた。

タオルと歯ブラシを自分の番号のケースとタオル掛けに戻すよう看守に促される。どうやら204番のようだ。

再入室、看守がボディチェックをする。

三人が自分のロッカーらしい場所からそれぞれ本を取り入ってきた。

「初めてまして・・・お世話になります。赤井と申します。」

どうじう挨拶をしていいか分からず、取りあえずありきたりの挨拶をする。

「俺は渡辺。こっちが高橋で、こっちが吉田。」  
一番年長の50代の体格のいい男が言った。

「昨夜はだいぶ酔つてたね！酒抜けた？」

さつき歯みがき粉を分けてくれた高橋が尋ねる。

「久しぶりにいい匂いがしたな～」

ひょろつと背の高い吉田が言った。どうやらだいぶ酒臭かったようだ。

「まだ抜けてないみたいです」

頭が痛いだけでなく胃もムカムカする。ひどい一日酔いだ。

「そうだろうな、まだ顔も紅いし、呂律が回つてないよー」「何やったの？」

記憶を呼び覚ます。

・・・・・いつたい昨夜は・・・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1752d/>

---

嘘人たちの部屋

2010年10月17日04時35分発行